

裁縫教科書に見られる着物の変遷

Transition of *Kimono* the way seen by sewing textbooks

加藤 花苗
Kanae Kato

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 人間生活科学専攻 修士課程

キーワード : 裁縫教科書, 長着, 裁ち方
Key words : Sewing textbook, Kimono, Cutting

1. 研究目的

平安時代末期以降, 庶民に筒袖(小袖)の着物が広まり, 武家社会を経て小袖の着物を普段着として日常的に着用し生活を送っていたことが多くの文献から解っている. その中で, 明治9年の裁縫教科書『裁縫手引艸乾』^[1]に「長着」という言葉が記載されており, その着物に関する裁断図面が記載されている. 「長着」とは, 半纏や羽織のような身丈の短いものに対し, 身丈が足首までである丈の長い着物を指している.

しかし, 日本は近代化を図るために明治初期以降, アメリカやヨーロッパの国々の制度や技術をはじめ西洋の物を積極的に取り入れようと試み, 制度や習慣が大きく変化した. 西洋の物が取り入れられ, 「和装化」から「洋装化」へと変化を遂げた. 「洋装化」に伴い, 日本社会で着装する衣服として洋服が一般的となり, 現在も着物を普段着として着用し生活を送る日本人は少ない. 着物を着用する機会の減少により, 着物を仕立てる機会も少なくなり着物を縫製出来る職人の減少に繋がっていると考える. これにより, 着物離れが加速し着物の縫製に関する職人や指導者の不足に陥り, 現在では着物業界の衰退が問題視されている.

着物は長い歴史の中で受け継がれ日本の伝統文化の一つとされ, 日本が誇る伝統ある着物の魅力をより多くの人々へ広め, その伝統を受け継いでいくことが大切であると考え. そのためには, 着物を知る上で重要となる「裁縫教科書」についての理解を図り, 裁縫の指導内容や裁縫を学ぶ上で重要となる要点を明らかにし, 男女に関係なく多くの人々が着物を学ぶことの重要性について考察し, 日本の伝統文化の魅力について理解することが必要不可欠である.

2. 研究実施内容

本研究では, 本学の図書館や国立国会図書館所蔵の明治時代の裁縫教科書を用いて, そこに記載される内容を読み解き特徴や重要となる観点について論じた. また, 裁縫教科書に記載されている大裁女物長着の単衣長着を取り上げ, 裁断に関する記載内容を読み解き, 裁断方法の変化や重要となる観点について結果・考察を行った.

最後に研究結果及び考察についてまとめ, 裁縫教科書の分類を行い, 今後の裁縫教育における展望や課題について論じた.

裁縫教科書の記載内容を読み取った結果, 裁縫教科書の冒頭に女性にとって裁縫は定務や女性の努めのような記載がされていた(図1).

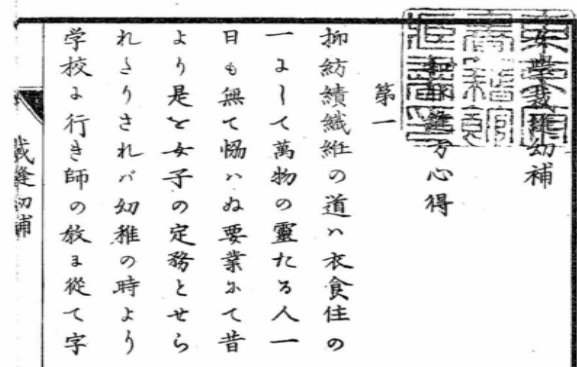


図1 定務の記載内容

また, 縫製の出来ない女性は恥と考えられていた程, 当時は裁縫を学ぶことを重要視していた時代であった. そのため, 明治時代と現代では裁縫を学ぶ姿勢に大きな差があると考え. 明治時代の人々は裁縫を学ぶことで女性として評価され, 職務として考えていたからこそ何枚も着物を仕立て, 子供や孫へと裁縫を指導していたと考える.

しかし、現代人は日常的に着用する衣服として洋服を着用し、着物に触れる機会が減少したことで着物への興味や関心が希薄化したと考えられる。

また、明治時代の教科書には縫製に関する説明文の記載がない部分(図2)については、口述指導によって裁ち方や縫い方について指導がなされていたと考える。

当時は一斉授業ではなく一人一人手に取って指導を行っていた。また、教員も1~2人程度で指導を行っており、現在のようなICTや実物投影機のような機械もなかった時代であり、細かい作業など全生徒に指導することを考えると、教員の苦勞や指導方法の大変さが伺えた。

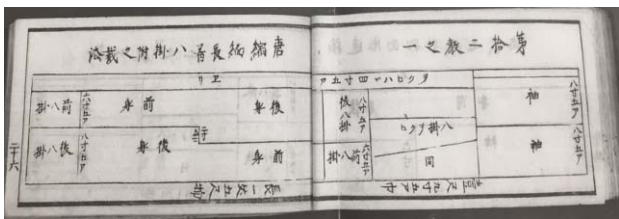


図2 『裁縫手引艸乾』^[2]の記載内容

明治11年の教科書では、学年によって縫製技術の難易度を上げていたことが解った。10歳~13歳で白無垢や振袖、袴等の着物を縫製出来るような構成になっており、当時の裁縫技術のレベルが高かったことが解った。現在でいえば、家政科のある高校や被服学科のある大学が学ぶ内容である。

明治32年以降から教科書を上段下段の二つに分けて記す二部形式の教科書(図3)が存在していたことが解った。

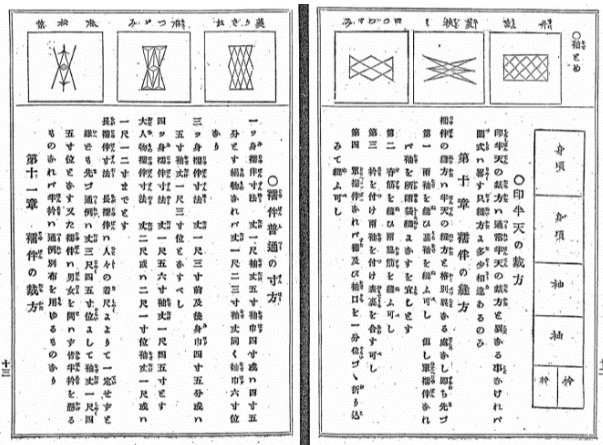


図3 二部形式の教科書の記載内容

着物の仕立て方だけでなく、日常生活の中で使用する布団や小物類、食事に関する内容や客人の心

得等について記載されていた。また、染色に関する内容や染み抜き、着色物の落とし方等が記載されるなど、以前よりも記載内容が多くなり衣服以外の分野について記載されるようになった。上段に食事に関する内容やマナーについて記載し、下段には着物の仕立て方等が記載されていることで、1冊の教科書で様々な分野を学ぶことが出来るようになっていた。

例えば、大裁ち女物単衣長着の裁断では、4種類の裁ち方が記載されている。つまり、棒衤裁ち、鉤衤裁ち、柳衤裁ち、広幅裁ちである。こうした裁ち方を用いて、限られた用尺の中で目を見張るほどの効率的な裁ち方が行われていたことが考察できた。

上記の結果から、和服以外の食事に関する知識や日常生活で用いる小物についての裁縫技術を修得させるために教科書を二部形式としていることが考えられる。当時は着物を仕立てることが重要視されており、和服を中心とした記載内容であった。しかし、明治30年以降から着物の裁縫だけでなく、生活していくために必要な知識や技術について修得させることを目的としていたことが考えられる。

また、裁断図面を見ると、裁断や縫製に関する説明文等の記載がされておらず、裁断図面や裁断寸法のみ記載されていた。さらに、裁断する際に重要となる印つけに関する記載も一切記載されていなかった。当時の女性は、何度も何度も着物の縫製を行っていたため、印つけを行わず仕立てる者の勘で着物を仕立てられる程度の知識と技術があったと考えられる。

こうした結果から現在の人々が着物を縫製出来ない理由として、着物の裁縫の経験が少ないことや着物と接する機会が少ないからであると考えられる。裁縫を行う時間をもっと作り、時間をかけて何枚も何枚も仕立てることで明治時代の女性のように勘で着物を仕立てることが出来るようになる。着物は、一度や二度仕立てただけでは着物を一人で縫製することは困難に近いと考える。それ程、着物を仕立てることは困難であり、裁縫が出来る人程周りからの評価が高いと言える。

裁縫を学ぶことで、着物を通じて人との繋がりが出来る。日本の着物は海外からも評価が高く、着物の知識や技術を知っていることで日本の文化を伝えることができ、様々な人と繋がる事が出来る。上記で述べたように着物の縫製は困難であ

るため、縫製が出来るようになると達成感や楽しさを感じることが出来る。また、縫製工程が解るようになると他の着物にも挑戦してみようという意欲が湧き、もっと知識や技術を極めたいと感じる。回数を重ねることで、運針も上達し綺麗に早く縫製することが出来るようになる。また、寸法を計測しなくても自己の勘で出来上がりの位置を把握することができ、印が分からなくなっても縫製することが出来る。

3. まとめと今後の課題

今後の取り組みとして、多くの人々が着物と触れる機会を作り興味・関心を引き出すための取り組みが必要であると考えている。

そこで、夏季の長期休暇の時期を活用し家庭科の授業の一環として短期間の集中講座を設けることとする。和裁士の方や地域の方、家族の方に協力していただき、和裁士の方を中心に着物の縫製方法について指導を行う。

また、生徒だけでなく教員も免許更新講習の際に着物に関する知識や技術が学べるような講義を取り入れる。学んだことを授業に活用出来るように取り組む必要がある。

こうした取り組みを行うことで、着物を学ぶことの重要性について多くの人々が考え、今後の和装教育の取り組みに興味や関心をもつ人が現れると考える。

4. この助成による発表論文等

学会発表

- [1] 加藤花苗, 裁縫教科書に見られる着物の変遷, 日本衣服学会, 2017年10月28日, 宮城県仙台市

参考文献

①雑誌論文

- [1] 飯島偉孝; 「明治初期における服装技術史上の和服と洋服裁断技術の接点」; 日本風俗史学会, 1, (1968)
- [2] 安城寿子; 「明治末から大正期における裁断技術の向上を図る動きについて—男性洋服の製作的側面に見る日本服飾の近代化の位相—」; 意匠学会, デザイン理論, 58, (2011)

②図書

- [1] 上田正庸; 『女学裁縫幼補』; 江藤喜兵衛, (1877)
- [2] 田淵信頼; 『裁縫手引艸乾』; 吉岡宇三郎, (1876)
- [3] 東京婦人会; 『和洋裁縫のおけいこ』; 岡村書店, (1907)

付記

本研究は大妻女子大学人間文化研究所の研究助成(DB2908)「裁縫教科書に見られる長着の変遷」を受けたものである。